

外国ルーツの子 学習支援10年

亀岡市で外国にルーツをもつ児童生徒の学習支援に取り組む「ひまわり教室」が、活動開始から10年を超えた。日本語の会話はできても読み書きに困難さを感じる子どもは多く、本人の希望や状況に応じた個別指導で学びの保障を支えている。運営する市民団体は学校との連携を深め、支援が必要な子どもたちの受け皿の充実を目指す。(梶井進)

「『さ』にあらず」は『そ』ではない」という意味です。腹鼓は、おなかをポンポンすることね」

中国出身の中学3年生の横に座った、日本語教師の女性が国語の古典の問題文と一緒に読み上げていく。ゆつくりと、時には身ぶりを交えたりスマートフォンで画像を示したりして、理解を助ける。

月2回、日曜午前にガレリアかめおか3階の会議室が「教室」になる。現在、中国やフィリピン、カナダなどがルーツの小中学生10人が利用する。南丹市から

も1人通う。指導者はボランティアで教員経験者が多い。

大成中3年廣嶋翔さん(15)は、母親がマレーシア人で4歳から10年間現地で育った。英語と中国語、日本語も不自由なく話す。が、「日本語は読むのが苦手。読んでもらうと理解しやすい」。「学校だと先生が忙しくて遠慮してしまうが、ここはマンツーマンで質問しやすい」と教室の良さを話す。

保護者からも信頼される。シリア出身で留学を経て日本国籍を取得した会社

学校と連携、受け皿に

員品田井サワフンさん(46)は、日本で生まれた安詳小6年大夢さんを通わせる。サワフンさんは「漢字は読めても書けない。算数は母国の教え方と違う。自分では教えてあげられないので教室は助かる」。

ひまわり教室は、多文化共生に取り組む亀岡市の市民団体「オフィス・コン・ジュント」が、2014年5月にスタートした。これ



●それぞれ取り組みたい教科の宿題や問題集を持ち寄って学習する「ひまわり教室」(亀岡市余部町・ガレリアかめおか)●両親がシリア出身の大夢さん(右)は元教員の女性からマンツーマンで漢字の宿題を教えてもらっていた

まで20人超の子どもたちが参加してきた。

小学校教員だった代表の児嶋きよみさん(73)は、この10年で市教育委員会との連携が進んだと手応えを感じる。校長会で活動を紹介したり、教室での学習状況を各校にレポートしたり

するほか、本年度から市教委の担当者と毎月の会合で情報共有を密にしている。一方、支援の手が十分届

いているか心配する。児嶋さんは「一見普通に話せても、学習に必要な日本語力が身につけていないケースは多い」と指摘。保護者や教員が必要を感じずにサポートを受けている子どもがいるのではと案

じる。文部科学省の昨年度調査で、外国生まれなどのため日本語の指導が必要な児童生徒が過去最多を更新。労

働力不足を背景にした在留外国人の増加に伴い、外国籍の子どもが今後も増えると思われる。

市教委は学校現場の支援を強める。非常勤だけだった授業時などの教育支援員に、昨年新たに中国出身で日本語指導の経験がある張穎さん(60)を常勤で採用し、対策も担ってもらう。学習支援が必要な子の人数を把握するため、今年初めて学校へのアンケートも行った。

張穎さんは「日本語の基本がないと、授業中に先生の言葉を全て翻訳しないといけない」と、来日直後などの子どもを対象にした日本語教室の必要性を感じている。児嶋さんも「保護者の日本語理解も含めて、状況やニーズが多様な子どもたちに合ったさまざまな支援が必要」と訴える。

